

優秀賞

私の大好きなおばあちゃん

高槻市立阿武山中学校 三年 野崎^{のぎま} 星那^{せいな}

二年前の夏のことだった。母が祖父からかかってきた電話で深刻そうに話していた。一体、何があったのだろう。その電話は、その頃の祖母の様子だった。「今日の夕食は何にしようか。」と祖母と献立を考えたにも関わらず、そのまた数分後に同じ会話をくり返すというようなことが多く感じられるようになり、心配して母に相談してきたのだ。母と祖父は少しでも早く認知症の検査のため、祖母を病院に連れて行きたかった。しかし、祖母は、「大丈夫。」と言ってなかなか話を聞いてくれなかったそうだ。ちょうど良いタイミングで祖母がいつも観ているテレビ番組で若年性認知症や認知症予備軍について特集されていた。そのこともあり、祖父と母は上手に話をして同じ年の秋に祖母を病院に連れて行くことができた。検査をすると、位置関係が苦手になってしまいう認知症予備軍だった。それからは、認知症の進行を遅らせることのできる飲み薬を飲み始め、専門の病院に通院することになった。

このようなことは、祖母だけでなく高齢化社会なので、いつ誰に起きてもおかしくはない。世界中のどこの国でも認知症の人はいる。一人暮らしの高齢者は、身近な人がいないため生活の変化に気づいてもらえず、認知症の症状が高度になる可能性が高いと思う。

しかしスウェーデンでは、「医療中心」から「福祉中心」に転換してきた。基本的な医療の勉強を修めた介護スタッフ、アンダーナースによる介護を受ける人たちのニーズに臨機応変、柔軟に対応する働き方、オムソリーというケアが行われているそうだ。

例えば、認知症にかかる国の経費は、85%を福祉ケアが占め、医療はわずか5%にとどまっています、病院の数は日本と比べて、格段に少ない。

アンダーナースによるホームヘルプを利用する認知症高齢者のうち、約半数が一人暮らしを続けているそうだ。その背景には、別居家族による介護があり、地域の見守りが存在するおかげでもあるが、最大の理由は認知症が悪化していないからだ。短い訪問で認知症の人が在宅生活を維持できている。日本の認知症ケアは管理的で、治療を前提とした医療主体で語られることが多いのが現状だ。

これらから、人と関わることは大切である。人と接することによって、刺激を与えたり、その人の体調の変化を知ることができるとは思っている。人と接することによって、刺激を与えたり、その人の体調の変化を知ることができるとは思っている。

私は祖母に私の部活の発表会や兄の野球の試合など、積極的に声をかけて来てもらおうようにしている。危ないからと思って一人で行動するのをなくすのではなく、自分の力で電車とバスを使って私の家まで来てもらおうようにしている。危ないからといって、今できることを減らすのではなく、みんなで温かく見守ってあげるようになっている。私と兄の一生懸命部活をしているところを見て、とても喜び、元気になってもらえるので、良い刺激になっていると思う。

祖母は、仲の良い友達と食事や買い物に行ったり、旅行にも行ったりするそうだ。周囲の人の支えもあり、家の中で閉じこもるのではなく、明るく楽しい生活を送ることができている。

今もおいしいご飯を作ってくれると祖父は喜んでいて、二年前のあの時、祖父が異変に気づき、すぐに母に相談したことで早く治療を受けることができて良かった。これは、周りの人がいるからこそ、気づけたことである。

先月、福祉施設で男性が身勝手に残念な、とてもひどい事件があった。その男性は、福祉施設にいらっしゃる方々に対して、「生きる価値がない」や「人間でない」など、身勝手な個人の考えでたくさんの命を奪った。

しかし私は、たとえ身体障害者であろうと認知症患者であろうと、人として生きる人権は皆平等に与えられているものだと思う。

今の日本の認知症に対する取り組みは、医療中心だが、スウェーデンのように認知症の人達が社会の中で普通に生活していけるような福祉の面においても、もっともっと充実させていかなければならないし、私たちが将来そういう社会を作るよう努めなければならない。